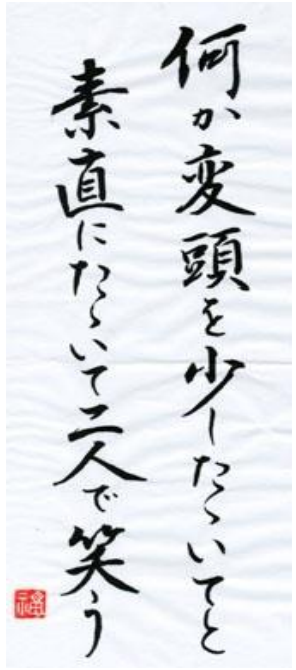
何か変頭を少したゝいてと素直にたゝいて二人で笑う

ＮＨＫ介護百人一首

応募8，332首　友人が入選



↑森さんの書

この「何か変…」で、NHK介護百人一首」に入選した、流山の森ふくさん(74)は、10年来の友人である。習字の先生をしていて、逆井の、仲町にも近い「ずみ園(身体障害者通所授産施設)」に毎週手伝いに来ていた。

森さんにも涙ぐましい介護人生があったことを初めて知った。50年前の話である。まだ、介護とか施設などのない時代だった。

60歳の姑さんと同居が始まり、家事いっさいをやってもらい、森さんも仕事に専念していたが、姑が64歳で食道がん、それに認知症が始まる。家族が協力しあっての介護だったという。介護9年の体験が、この一首となった。

介護9年、夫婦の本番に生かす

姑は私をたいへん大事にしてくれた人です。認知症が始まったころ、よくこんなことを言っていました。自分でも理解出来なかったのだと思います」

森さんは詞書にこう書く。こんなこととは、「何か変」ということ、頭を少したいてみて」という。たたいたら音が出た。笑いあう義理の親子。それが本当の親子になった瞬間だったのだろう。

いつもズボンをはいて寝た。いつ異変が起こるか。介護9年、姑は73歳で亡くなった。ズボンを脱ぎ、寝巻きになって、そのゆったりしたことを実感した。森さんの、今の心境はこうだ。

今までの姑の介護はリハーサル
互いの介護はこれから本番

選者の一人・毒蝮三太夫さんの左が森ふくさん、右は夫の正男さん。左端は習字の友人で介護短歌に導いてくれた人

多様な介護人生、30歳から96歳も

8332首から選出された100の介護人生はさまざまである。

最高齢96歳の女性の一首。

罵詈雑言くりごと多き老人にジョークで答ふ若き看護士
やさしく対処するいじらしさに感激」という詞書がつく。

グループホーム野菜を刻む僕の手を心配そうに見つめてる

介護学校の実習生(30歳)、認知症の女性が心配そうに。

連続入賞した66歳の女性は施設の職員らしい。

右マヒと左マヒとがすり鉢で擂りし豆腐で白和え作る

この女性は施設に歌の会を作り、その「生徒」二人が入賞する快挙。78歳と86歳の入選歌を並べる。

車椅子早朝よりの日課終えひと日の幸を片手で祈る

まだかしら園の居酒屋店開き美味しいつまみ思ってゴクリ

月2回ホームの居酒屋が開かれるそうである。話が弾む。

長崎被爆者から。子を連れて行ったのは昔、今は連れられて。

連れられて被爆健診うけにゆく子に握らるる手のあたたかし

迎へ行くショートステイの窓越しに我を見付けて妻が手を振るいじらしい妻を詠む。万葉集の本歌取の趣き。

五月中旬から6回目の募集が始まる。問い合わせNHKサービスセンター「NHK介護百人一首」〇三―三四六四―五六〇一

末広クラブ・逆井漫歩157　平成23年3月